以上のように法蔵の楞伽経に関する見解を考察するとき、彼はこの経の頓教的側面に注目していたことが明らかとなる。すなわち、自覚聖智、一心、阿梨耶識等の教説を宗趣としてどこまでも言説の立場にありつつ究極的には無礙の立場を楞伽経の中に見い出していたのである。それ故に楞伽経の所説は法界縁起への重要な礎石となりうるのである。

形而上学的思惟と「差別（デイファレンツ）」

藤井　敏

『存在と時間』を中心とせる初期の問題圏域から、ハイデッガーの思索はいわゆる「転回（ケーレ）」を経て、「形而上学の根拠の内への還り行き」(der Rückgang in den Grund der Metaphysik) として形而上学の本質をその根底から問題にするようになってゆく (Wegmarken, S. 195)。「差別」の問題を形而上学の本質との関わりから、鋭く究明している『形而上学の存在＝神＝論的構制』（一九五七年）という後期の問題作がある。これはハイデッガーの形而上学に対する理解を前提しているので、先づそれを概観しておこうと思う。形而上学は存在者から出立して、存在者を存在者であらしめている「存在者の存在」を探究する。つまり、一般に存在者を存在者へと規定しているものは何であるか、という仕方で問うことである。そこでは「存在者一般」(das Seiende im Allgemeinen) に関して、その根拠としての「存在者の存在」が問われている。従って存在者の存在は「存在者の根拠」であり、すべて存在するものはただ単に存在しているのではなく「根拠づけられてあるもの」(das Gegründete) である。かくて存在者の存在は、その根拠として存在者を超越している。かように存在者を越えて「存在者の存在」即ち「存在者の根拠」を探究することとして、第一の哲学は自然学を越えた学となる。この方向へその探究がなされる場合、形而上学は「存在論」として展開する。

然るに形而上学はまた、「存在者の全体」(das Seiende im Ganzen) を全体として規定し統べている根拠は何であるのか、という仕方で問う。その場合「存在者の存在」たる「存在者の根拠」は漠然と何処かに存在するのではなく、それ自身或る一つの確たる存在者として捉えられる。それは「最高度に存在するもの」(das Seiendste) 若しくは「最高の存在者」として、あらゆる存在者の「根拠であるもの」(das Grundseiende) とされてくる。つまり「存在者の存在性 (Seiendheit)」を最も完全な形で実現している存在者にして、すべての存在者を存在者であらしめているものとされる。かかる至高の存在者即ち「神」乃至は「神的なるもの」を探究することとして、第一哲学はいわゆる「最も尊貴（ティミオス）なる認識」とも言われた。このような方向へその探究がなされる場合、形而上学は「神学」に究極する。かかる両特質によってハイデッガーに従えば、西欧の形而上学はヘーゲルに至るまで、「存在＝神＝論」(Onto-theologie od. Onto-Theo-Logik) という根本体構をなしている (Nietzsche Bd. II, S. 348 f. etc.)。

ほぼ以上の如き理解から、形而上学の本質への思索が進められ

る。その場合、「形而上学」とはハイデッガーにとって、もはや哲学の学科部門の一つではなく、謂わば西欧的思惟の方式として捉えられている。このように捉えられた形而上学的思惟においては、いつもただ存在者を存在者として表象するという点において、存在そのものをば思惟してはいない(Wegem, S. 196)。言い換えるならば、存在は、あらゆる場合に何時も「存在するものの存在」(Sein des Seienden) として思惟されている。この場合の属格は、「存在するものを(genetivus obictivus) 存在セシメテイル」という意味に解される。また、存在するものは常に至る処で Seiendes des Seins を意味している。この場合、属格は「存在は(gen. subi.) 存在するモノデアル」というように考えられる (Identität u. Differenz S. 53)。従って、ボックも言っているように「存在は存在者の存在として、存在者は、存在の存在者として現成(ゲェーセン)する」(Irmgard Bock; Heideggers Sprachdenken, S. 85)ことになる。「存在」と「存在者」とは畢竟するに、或る同じ場面に属するものということになりはしまいか。それにも拘わらず、同一射程内に有りながら両者の間は画定している。しかし存在と存在者との間に区別が存する限り、両者の射程は本質的には一致しないはずである。たとい同一の場面に両者が存在し、常に密接なる連関を保持し合っているにしても、そこには区別ということが何らかの意味で成り立つような、或る別の場がなければならない訳である。それは、かかる区別が露わになってくるような処であるとも言える。

扨て、存在論的差別とは存在と存在者とを区別することであって、形而上学の本質はこの区別に基づいている。ところが形而上学自身は存在者を存在者として、即ち「存在者の存在」を思惟するが、存在を存在として、即ち存在をそれの真相(ヴァールヘイト)において経験することはない。「形而上学は、存在と存在するものとが互いに他に向けて且つ互いに他から別ちつつ保持されているような次元の内で相も変らず動いているが、その場面そのものを、即ち存在論的差別をそれの本質由来において経験することもなければ、事象に即して言葉にもたらすこともない」(Alfredo Guzzoni; Ontologische Differenz und Nichts)。それで形而上学的思惟の内においては、互いに他から別ちつつ且つ互いに他に向けて保持されている存在と存在者とは、或る同一の場面に属していることになる。存在者と存在(即ち「存在者の存在」)という謂わば枠組みとも言うべきものが成り立つのは、その根底に「区＝別 (Unter-Schied)」ということから「区別されたるもの」として、その両者が現ずるからである。存在するものとその存在とは従って、「区別されて有るもの」であり、区＝別とはそれを成り立たしめているものとして捉えられる。これが、「存在と存在するものとの統理的区別としての原在」(das Seyn als den waltenden Unterschied von Sein und Seiendem)ということである(Wegm, S. 56)。「存在すること(ダス・ザイン)」と「存在するもの」とを区別して有らしめ、その両者をば統べ理めている (walten) ような区別が、後に分ち書きして表わされる「区＝別」ということであると思われる。そしてかように存在と存在者との区別の根源に有るものとして、「原在」は「(存在者の) 存在」とは別にもっと根源的に考え

られている。

一時期ハイデッガーは、存在が、或る時は存在者と存在という極(ポール)として、また或る時はその両極の根源として現われる二つの場合を、存在（Sein）及び原在（Seyn）という書き表し方で区別せんと試みていたが、後にこの試みは中止された事をミュラーは伝えている。それは「存在の方から（差別の根源及びその差別の両極という二つの存在の意味に基づいて）観る時、差別はその時々により無差別としても現われうるし、差別としても現われうる」（Max Müller; Existenzphilosophie, S. 44）という事態になってしまうからである。存在者とその存在という極の意味での「存在」は、あくまでも「存在者の存在」として現われる。その限りにおいて謂わば勝義の差別はそこにありえず、畢竟無差別として現われることとなる。なるほど「存在は形而上学においては、存在者に対して全き他者ではなくして、むしろ或る意味では一つの存在者とさえなる」（Guzzoni; ibid.）。かかる形而上学的思惟をその根底より問い質すことによって、存在と存在者を統べているような勝義の差別は呈質することになる。そうして「統理的区別としての原在」として捉えられた事柄と、後に『同一性と差別』の中で「存在者との差別に注視せる存在」（IuD, S. 37）と言い表わされていることは、同じ事柄を指し示していると思われる。それが端的に「差別としての存在」若しくは「差別そのもの」として経験されて来ることとなる。